赤川先生の想い出

～先生の飛行艇との係わりと学生時代に触れて～

M③・工学専攻科１回生　黒岩俊文

１．まえがき

私の学生時代、第五講座(熱力学及び熱機関)は中西先生が授業を担当し、卒業研究は第二講座(機械設計) 木下先生でしたので、赤川先生とは時折 実験室等でお目にかかる程度でした。先生に永年に亘りお世話になったのは、昭和 63 年先生が神戸大学を定年退官され龍谷大学に転職されてからです。

当時、私は新明和工業(戦前の川西航空機)で航空機関係の仕事を終え 人事・教育部門を担当していた関係で、時折 龍谷大学を訪問し学生の推薦をお願いしたりしていました。大学卒業後、久しぶりにお会いした先生は特別に時間をとってくださり、新しく開設された龍谷大学瀬田キャンパスの研究室や実験施設を案内して下さり、整った環境の中で研究を続け、学生を指導できるのを喜んでおられました。

２．川西記念新明和教育財団にて

２－１．評議員・理事をお願い

この財団は、川西航空機（株）初代社長 川西 龍三氏のご子息 川西 甫氏が新明和工業（川西航空機が前身）の役員を退任されるに際し、社会貢献事業として平成 4 年に設立した財団で「兵庫県内の大学での科学技術研究に対する助成と海外からの留学生への奨学金支援」を行っています。神戸大学工学部門での科学技術研究に対する助成件数も多く、現在も続いています。

赤川先生には、この財団の設立当初から「評議員」をお願いし、平成 12 年からは「理事」として平成 19 年ご病気で倒れるまで財団の運営にご尽力いただきました。

私は、この財団に当初から係わっていましたので「評議員会や理事会」で先生と接する機会も多く、懇談会でも親しくお話する機会を持つことができました。

また、川西 甫 理事長とは、先生が学ばれた旧制広島高等学校の先輩・後輩であったこと、更に、先生が京都帝国大学工学部航空学科在学中に海軍の依託学生（この制度は大学在学中に試験を受けて合格すると兵籍に入り、海軍から大学に教育を委託し卒業後に半年間の教育を受けて技術中尉になる制度）として香川県詫間町にあった宅間海軍航空隊基地で飛行艇（川西航空機製の二式飛行艇）に係る仕事に従事していたことから、お二人の話は弾んで時間の経つのを忘れる程でした。

２－２．新明和工業甲南工場にて

平成 14 年 12 月 先生のご希望もあり飛行艇を製造している新明和工業甲南工場で理事会・評議員会を開催し、飛行艇(US-1) の製造現場をつぶさに見ていただきました。
先生が海軍宅間基地で係っていた飛行艇(二式飛行艇)とは大きさも外形も殆ど同じですが、二式飛行艇は水上機であったのが飛行艇(US-1)は水陸両用機になっています。
昔を思い出し懐かしそうにご覧になられていた先生の姿が今も目に浮かんできます。
ご案内をさせていただいたことを非常に光栄に思っています。この時 ご一緒された方の中には、坂口先生と逸見昌三氏(M3)もおられました。

新明和救難飛行艇(US-1)の写真を背景に記念写真

上段：右から 3 番目が赤川先生、2 番目は逸見昌三氏(M3)、右端は黒岩
　　左から 3 番目は坂口忠司先生
下段：中央は川西 甫氏 (川西記念新明和教育財団　理事長)

３．先生からいただいた随想“私の学生時代—嵐の時代の青春を精一杯に生きて—”から

平成 12 年　赤川先生からお手紙と共に龍谷大学に勤務していた頃に書かれた随想をいただきました。先生の戦時中の学生時代、飛行艇との係わり等 先生を偲ぶ良い機会と思いますのでその中の一部を紹介させていただきます。(“……”は先生の随想を要約させていただいたものです。)

３－１．旧制高等学校の卒業を前にして　（昭和 18 年 7 月）

“旧制広島高等学校では、陸上競技部で短距離とリレーの選手として活躍していた。

インター杯での何種目かの優勝をねらっていた時、突然 大会の中止の知らせが飛び込んできて無念の思いをした。この無念さは国家が危機的な状況の中で競技大会の中止など些細な事と解っていても青春の苦く懐かしい思い出でもある。そして、大学での勉強を期待しながら寮生活、競技部生活の思い出多き広島の地を去り難い思いで去った。”

３－２．大学での勉強　（昭和 18 年 9 月～19 年 12 月）

“昭和 18 年 9 月　京都帝国大学の航空工学科に入学し学問の府に来た思いを深くした。航空学科は設立 3 年目で当時の花形学科であったが、物資不足の厳しい状況下で独自の建物は無く機械工学科内に置かれていた。一回生では、材料力学、構造力学、熱力学、… 、機械設計法、機械製造法などで機械工学科と同じ科目であった。二回生では、航空力学、航空機設計法特論、航空機構造学、航空原動機などの専門科目があり楽しみの持てるものであった。

３－３．勤労動員―愛知航空機にて―　（昭和 20 年 1 月～4 月）

“昭和 20 年 1 月から航空工学科のクラス全員は勤労動員によって「愛知航空機」で働くことになった。名古屋市の繁華街にある元料亭が宿舎で、大きな座敷に枕を並べ、同じ釜の飯を食う生活が始められた。そこでの仕事は、アメリカの爆撃機 B-29 遊撃用の双発戦闘機「電光」の排気タービン取付け架の設計計算であった。しかし、試作機の完成前に工場が爆撃で焼失し、期待の「電光」は遂に空を飛ぶことはなかった。

次の仕事は、艦上攻撃機「流星」のエンジン空気取入口まわり（機首部）の改造設計であった。「流星」は敵戦闘機と空戦ができる運動性の良い高性能機で、その改造設計が全く経験のない自分一人に任され、相談する人もなく一人で考え苦心の末 図面を仕上げることができ、実際の飛行機に採用されたときの安心感は大きかった。この苦心の「流星」も製作が間に合わず幻の飛行機となってしまった。

この愛知航空機での生活は 4 月で終わり名古屋を去ることとなった。”

３－４．第十一海軍航空廠 広にて　（昭和 20 年 5 月～6 月）

“広島県呉市にある第十一海軍航空廠（広）で、 海軍の依託学生として工作実習で自習をすることとなったが、数日後 工場は爆撃を受け壊滅した。爆撃の恐怖感が強く残っている。その後、戦闘機「紫電改（川西航空機製）」の原図作成が任務として与えられたが、工場は爆撃の後 仕事も殆どない状況でもあったので、先輩の誘いを受け香川県詫間町にあった飛行艇の修理・整備をする詫間工場に希望して移ることとなった。

３－５．第十一航空廠 詫間工場にて（昭和 20 年 6 月～8 月）

“香川県詫間町には詫間海軍基地に隣接する飛行艇の修理・整備工場があり、依託学生として業務についていたのは、終戦前の昭和 20 年 6 月～8 月のことだった。
その規模は、正規工員 100 名、徴用工 200 名の他に女子挺身隊 45 名、観音寺商業高等学校の学徒動員生約 200 名、善通寺高等女学校の学徒動員生約 200 名の大所帯だった。

工場内の飛行艇を目の前にして、これらの人達の監督もしながら学徒動員生の面倒をみていた。飛行艇の試験飛行では、機関砲の銃座が取り付けられて無かったので重心の関係から重量代わりに搭乗し、時には操縦席の後ろで操縦の様子を見ることができ、上空から瀬戸内海の景色を見下ろし飛行を楽しむこともできた。しかし、戦局が悪くなってからは米軍の爆撃を受け飛行艇が炎上し、7 月には詫間工場は次々と飛来する艦載機からの銃撃を受けた。

8 月 15 日敗戦を迎え、私に従ってよく働いてくれた善通寺女学徒生や観音寺商学徒生に別れの言葉を述べ、見送る時は万感胸に迫る思いであった。

数日後、技術学生の動員解除があり大学 2 回生の夏はこのようにして終わった。”

３－５．戦後、大学に帰ってから卒業まで （昭和 20 年 9 月～21 年 9 月）

“敗戦で航空機の製造も禁止され大学の航空学科も廃止となり、学科は「応用物理学科」として再開し卒業研究は「ガスタービン」を選んだ。当時の社会状況では就職口は殆ど無かったが、その中で神戸経済大学の教官として採用されることができた。

このようにして、学生時代は 昭和 21 年夏の戦後の混乱期に終わることとなった。

(神戸大学工学部において、生き甲斐のある研究の道を進むことになったのは、それから数年の後であった。)

４．あとがき

先生は、こどもの頃 芦屋の海岸で「川西航空機」の飛行艇を見上げて楽しみ、後に京都帝国大学航空学科に学びながら、敗戦により航空機関係の仕事につく道は断ち切られましたが、これが神戸大学工学部教官としての道に繋がり、教育者として多くの後進を育てるとともに、学界では気液二相流に関する研究に大きく貢献し、その業績は我国のみならず国際的にも高く評価されていることは申すまでもありません。

平成 10 年頃でしたか、夙川に在る先生のお宅にお招きいただいたことがありました。この時も、戦争の渦の中に巻き込まれた学生時代、神戸大学工学部に来てから生き甲斐のある研究の道に進めるようになったことを、しみじみとお話しいただきました。

先生のお人柄にも身近に触れることが出来、また、ひたむきな研究への情熱をいつまでも持ち続けられた先生から「与えられた環境の中で全力を尽くす大切さ」を教えられたことを深く感謝しています。ご冥福を心よりお祈り致します。

(終)

追悼文受付日：平成 28 年（2016 年）3 月 25 日　赤川先生－17